

南アジア長期農業統計 DB

<概略>

2012年10月

目的: 南アジア主要国（現インド、パキスタン、バングラデシュ）における20世紀初頭からの長期農業統計を整理し、マクロ（国、州）、セミマクロ（県 district）、ミクロ（農家）レベルの農業生産と消費行動と、市場発展の関連を明らかにするための基礎情報を提供する。

DB 作成者: 黒崎卓（一橋大学経済研究所、プロジェクトリーダー）。

変数および対象時期: 農地利用、主要作物作付面積、主要作物生産量、農産物価格、家畜・農具、農業就業人口、降雨量などの変数について、マクロとセミマクロに関しては、1901/02年度から現在までカバー。

DB 完成に向けた作業: 県境界の変更に伴う調整作業。現時点では、植民地期と独立後の両方をカバーする県レベルの長期パネルデータは、現パキスタンの西パンジャーブ地域のみ利用可能。現インドの県レベルのパネルデータは、1965/66年度以降について利用可能。

これまでの主要なファインディング:

- ・分離独立 1947年（1950年代初頭）を境とした農業成長の加速が、南アジア主要国で生じた。
- ・成長の源泉は、耕地拡大から作付集約度上昇、作付面積当たり生産性上昇へと変化していったが、その移行時期は地域によって顕著に異なった。
- ・生産性及び成長率の絶対水準はパキスタン>インド>バングラデシュという順位になるが、分離独立後の成長率の加速で見ると、差がないか若干バングラデシュ優位という順位になる。1971年バングラ独立後の成長率加速ではパキスタン<バングラデシュという関係になる。
- ・緑の革命 2 作物への集中進行、脱食糧穀類化など、付加価値の高い作物へのシフトが長期的に生じており、その結果、作付面積当たり生産性上昇が加速した。狭義の技術革新がなくても、空間的な資源配分の効率化によって生産性向上が生じた例として注目される。